

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19983

研究課題名（和文）中国語から見たアイヌ語のアスペクト形式の意味機能

研究課題名（英文）Semantic function of the Ainu aspectual forms from a Chinese perspective

研究代表者

馬 長城（MA, CHANGCHENG）

北海道大学・文学研究院・専門研究員

研究者番号：30963467

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国語の内容を研究成果に含める予定であった。しかし、アイヌ語の時間表現の記述が中国語と比べてあまりにも少ないため、中国語の視点からアイヌ語の時間表現に関わる現象を主に記述することにした。初年度には、中国語で継続形式と完了形式が共起しないという現象からヒントを得て、アイヌ語の継続形式「kor an」、「wa an」と完了形式「a」が共起する意味を記述した。次年度には、アイヌ語と同様に、テンスを持たない中国語で時間副詞が数多く存在することからヒントを得て、アイヌ語の時点を表す時間副詞に焦点を当て、その記述を行った。以上の研究成果はすべて学会で発表し、また論文として学術雑誌に投稿した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アイヌ語に関する研究は、日本語や中国語と比べてその数が非常に少ない。特に、アイヌ語の時間表現に関する研究は限られており、十分に解明されているとは言えない。本研究では、中国語の視点からアイヌ語を観察し、得られた成果はアイヌ語の時間表現に関する統語的および意味的な実態を反映しており、アイヌ語学において進展をもたらしたと考えられる。また、本研究で発表した論文の内容は、危機言語であるアイヌ語の活性化に関連する取り組みに役立つと期待される。今後も引き続き、中国語の視点からアイヌ語を観察し、さらに多くの言語事実を明らかにし、アイヌ語の活性化に貢献していきたい。

研究成果の概要（英文）：This study was intended as a comparative research between Ainu and Chinese, and planned to include findings from Chinese. However, because descriptions of Ainu temporal expressions are far fewer compared to Chinese, the focus shifted to describing phenomena related to Ainu temporal expressions from the perspective of Chinese. In the first year, inspired by the phenomenon that the continuous and perfect forms in Chinese cannot co-occur, we described the meaning when the Ainu continuous forms "kor an" and "wa an" co-occur with the perfect form "a". In the following year, we focused on describing temporal adverbs indicating specific points in time in Ainu, inspired by the fact that, like Ainu, Chinese, which does not have tense, has many temporal adverbs. All these research findings were presented at conferences and submitted as papers to academic journals.

研究分野：文学、言語学およびその関連分野

キーワード：アイヌ語 継続形式 完了形式 意味機能 時間副詞 発話時点 不定時点 絶対的時点

1. 研究開始当初の背景

アイヌ語のアスペクト形式「kor an (している)」、*wa an (している)*、「a (た)」は従来の研究でその意味機能がそれぞれに「動作継続」「結果継続」「完了」というふうに解釈されている(中川 1981, 佐藤 2006, 2007)。しかし、これらの意味解釈は実際に、アイヌ語のデータにおいて説明できないところが多々ある。また、吉川(2021)は「kor an (している)」、*wa an (している)*を存在型アスペクトとして解釈しているが、消滅危機に瀕するアイヌ語のデータ量の制限なのか、記述言語学で求められる自然会話のデータに加え、「雅語」という言語形式の特殊なデータも取り入れられている。これはやむを得ない方法ではあるが、最終的にすべての現象を統一的に説明ができていないと言いがたい。

上記の諸結果を得られたのは、脱場面・脱文脈化されている文を最大単位として議論したのか、文レベルとテキストレベルを区別しないまま議論を行ったのか、ということだと考えられる。馬(2022)は上記のアスペクト形式のうち、「a (た)」を対象とし、中国語のアスペクト形式「過」と対照しながら、文を越えるテキストレベル(いくつかの文からなる単位)で「a」の意味機能を再検討し、「a」はテキストレベルで「継起性」という意味を表わすことを明らかにした。故に、「a」と同じようによく使われている「kor an (している)」、*wa an (している)*の意味機能も、テキストレベルで再検討し、今まで説明できなかった現象を解釈できるのではないかと期待されている。

2. 研究の目的

本研究は中国語のアスペクト形式「在(している)」、*着(している)*の視点から、アイヌ語のアスペクト形式「kor an (している)」、*wa an (している)*を、文を越えるテキストレベルで議論し、その意味機能を明らかにすることを目的とする(課題1)。また、「kor an (している)」、*wa an (している)*、「a (た)」と時間副詞と共に起する場合に、意味変化が予測されるので、この点も考察対象に入れる(課題2)。

3. 研究の方法

本研究は文献資料を用いて、言語の対照研究という範囲で、中国語の「在」、「着」、「過」の視点からアイヌ語の「kor an」、「wa an」、「a」と共時的な枠組で、意味的、構文的な異同を整理する。その際、中国語の資料は、北京大学中国語言語学研究中心が作成したCCLのうちにある現代中国語コーパスを用いる。アイヌ語の資料は、申請者がこれまで刊行されているアイヌ語の資料に基づいて独自に作成した49万語のデータベースを用いる。

4. 研究成果

本研究はアイヌ語と中国語との対照研究であり、中国語の内容を研究成果に含める予定であった。しかし、実際にはアイヌ語の時間表現に関する記述が中国語と比べてあまりにも少ないため、中国語の視点からアイヌ語の時間表現に関わる現象を主に記述することにした。

当初の課題1について、テキストレベルではなく、文レベルのデータを収集し、アイヌ語の「kor an (している)」、*wa an (している)*、「a (た)」に関する分析を試みた。2022年度には、中国語で継続形式と完了形式が共起しないという現象からヒントを得て、アイヌ語の継続形式「kor an (している)」、*wa an (している)*と完了形式「a (た)」が共起する意味について記述した。

アイヌ語の「kor an a」は主体動作動詞と共に起する場合：1、発話時まで続き、発話以後も続く可能性がある継続動作；2、最近の活動；3、個々の時間幅のある継続動作からなる習慣；4、点として捉えられる継続動作からなる習慣を表す。「kor an a (ていた)」は主体変化動詞、客体変化動詞と共に起する場合、限界のある過程として捉えられる。一方、「wa an a (ていた)」は状態動詞、主体変化動詞、客体変化動詞と共に起する場合、それぞれ「その状態が発話時点まで続いていること」、「最近の状態」、「その変化の継続結果が発話現在において鮮明に残っていること」を表す。

この成果を2022年10月の北海道民族学会の研究会にて発表し、指摘された点を修正したうえで『北海道言語文化研究』第21号へ投稿し、採用された。

当初の課題2について、「kor an (している)」、*wa an (している)*、「a (た)」と時間副詞と共に起する場合の意味変化の記述を試みた。2023年度には、アイヌ語と同様に、テンスを持たない中国語で時間副詞が数多く存在することからヒントを得て、アイヌ語の時点を表す時間副詞に焦点を当て、その記述を行った。

アイヌ語の時点を表す時間副詞には、「発話時を基準とする時間副詞」、「不定時を基準とする時間副詞」、「絶対的時点の時間副詞」の三種類が存在する。まず、「発話時を基準とする時間副詞」には、発話時を含む時間帯を指すもの、発話時以前を表すもの、発話時以降を表すものがあ

る。発話時を含む時間帯を指す時間副詞には、「過去、現在、未来」の3つの意味を表せるものと、「過去、現在」の2つの意味しか表せないものがある。発話時以前を表す時間副詞は経歴と経験を表すことが多く、発話時以降を表す時間副詞は命令と禁止と共起することが多い。そして、「不定時を基準とする時間副詞」はさらに「不定時を含む時間帯」、「不定時以前」、「不定時以降」を表す時間副詞に分けられる。不定時を含む時間帯を指す時間副詞には「過去、現在、未来」を表せるものと、「過去、現在」を表せるものがある。また、「絶対的時点の時間副詞」については、日本語のような暦法的な副詞は少ないが、時間軸で一定の間隔をおいて繰り返し現れる時間副詞は数多く存在する。これらの時間副詞が指している時点が過去なのか、現在なのか、未来なのかは、それ自体では決まらず、発話時が時間軸上のいつに当たるのかによって決まる。

この成果を2023年11月の日本北方言語学会の研究会にて発表し、指摘された点を修正したうえで『北方言語研究』第14号へ投稿し、採用された。

これらの論文で取り扱った内容はアイヌ語の時間表現の実態を反映しているため、アイヌ語の活性化に関連する取り組みに役立つかと思われる。今後も引き続き、中国語の視点からアイヌ語を観察し、さらに多くの言語事実を明らかにし、アイヌ語の活性化に貢献していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 馬 長城	4. 巻 14
2. 論文標題 アイヌ語の時点を表す時間副詞	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 177-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 馬長城	4. 巻 21
2. 論文標題 アイヌ語の継続形式 + 完了形式の意味機能	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 馬 長城
2. 発表標題 アイヌ語の時間副詞とアスペクト形式の共起に関する研究
3. 学会等名 日本北方言語学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 馬長城
2. 発表標題 類型論から見たアイヌ語の継続と完了形式の意味と共起問題
3. 学会等名 北海道民族学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------